



書評 生物多様性条約と名古屋議定書の課題 「生物資源へのアクセスと利益配分 (ABS)」問題 —科学と産業の視点から

著者 炭田精造

A5判・222ページ，定価：2,500円（本体）+消費税，けやき出版

著者自身、本書を出版する思いを以下のように述べている。「1996年にABS問題に足を踏み入れることとなり、それ以来、20年間も途切れることなくABS問題に取り組むという結果になった。名古屋議定書に至る過程での一次体験に基づいて、現場で見た出来事を、将来の世代のために記録しておくことが必要なのではないか」と。実際著者は、1996年にプエノスアイレスで開催された生物多様性条約 (CBD) の第3回締約国会議 (COP3) から2010年に名古屋で開催されたCOP10を経て、2016年メキシコで開催されたCOP13まで途切れることなく参加し、常に、CBD-ABS問題を研究し、世界の場で議論してきた。したがって、本書はCBDを巡るさまざまな出来事について著者の経験が余すことなく綴られている。

本書は、第1章 はじめに南北問題があった、第2章 生物多様性時代の幕開け、第3章 日本の新時代型「微生物資源センター」の設立、第4章「アクセスと利益配分 (ABS)」時代の到来、第5章「名古屋議定書」に至る泥沼の南北交渉、第6章 名古屋議定書の実施とその後の状況、の6章から構成されているが、私がおっとも興味をひかれたのは第5章である。ここでは、2002年の途上国による「ちゃぶ台返し」からCOP10での名古屋議定書の採択までが綴られているのであるが、特に、COP10の最後の二日間で急遽採択された名古屋議定書の謎についての解説は興味深い。まるで出来のよい推理小説を読んでいるようでもある。また、本章では著者の優れた国際センスが存分に語られている。たとえば、コラム「国際交渉の心得12カ条」は国際舞台で長年活躍してきた著者だから言える12カ条であり、是非とも心に留めておきたい言葉である。また、「国際交渉で負けない」ための心構えや、OECDとCBDにおける「国際交渉」の場で学んだこと、ある専門家の典型的なABS交渉会議の一日など、国際畑で勝負してきた筆者だからこそ語れる言葉が連なっている。

このような素晴らしい本を残してくれた炭田さんであるが、残念ながら2021年5月29日に79歳で永眠された。本誌第95巻第1号のバイオ系のキャリアデザインで「バイオ産業」で「国際人」を目指すと題して綴られた炭田さんの国際人としての生き様が忘れられない。
(玉川大学農学部客員教授，元NITEバイオテクノロジーセンター技監 安藤 勝彦)